慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	春水初期人情本『貞烈竹の節談』考：畠山裁きを中心に
Sub Title	Shunsui Tamenaga's Teiretsutakenoyogatari
Author	鈴木, 圭一(Suzuki, Keiichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.1 (2006. 12) ,p.64- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関場武教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910001-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

春水初期人情本『貞烈竹の節談』考

――畠山裁きを中心に

鈴木　圭一

関場先生から得た多くの学恩の中で、「本の見方」は一つの大きなものである。わけて古書探求は、私の日常に欠かせないものとなってしまった。拙稿は、その感謝の念の一端に叶うことをもくろむものである。

文政七刊『貞烈竹の節談』は、南仙笑楚満人（＝為永春水）・驛亭駒人合作渓斎英泉画という春水の初期人情本である。この作品は神保五彌氏が『為永春水の研究』で、棚橋正博氏が「人情本論（三）」で、指摘される通り、中本三冊という短さで完結させる等のために、色々無理があり、一話の物語としては読者に構成の乱雑さや破綻を感じさせるものとなっているといってよいだろう。しかし、後年の『梅暦』につながると思われる作品であり、また諸要素が素材のまま出されている様相も呈している。よって本稿で点検を試みたい。

一　『松の操物語』

本作品は一筆庵主人（＝渓斎英泉）作画（文政三序同四刊）『松の操物語（まつのみさほものがたり）』の続編である。

『松の操物語』については、棚橋正博氏が「帝京国文学」8所収「人情本論（三）『松操物語』」（2001）に御論考と翻刻を示され、また岩波講座「日本文学史」第10巻「一九世紀の文学」（1996）所収「戯作の大衆化」にも触れられるところである。よって本稿では『貞烈竹の節談』考察上必要なことを触れるにとどまる。

『松の操物語』の内容（『貞烈竹の節談』を考えるために登場人物名は詳しく記した）。

上巻［発端］浪人吉田実作が妻に死なれ娘を捨て子。二神が地上に降り立ち、福の神は福田屋へ貧乏神は徳島屋に入る。娘は福田屋亀六に拾われる。［第壱回］十六年後、利欲人の徳島屋歩平の息子孝五郎は三浦屋菊の井に馴染んでいる。母おみねに出入りの医師正宅が富家の娘の縁談話を持ち込む。歩平は懇意の富貴屋徳右衛門に孝五郎に意見してもらい、縁談整う。娘は福田屋に拾われたお艶である。

中巻［第貳回］福田屋亀六の元へ、徳島屋に嫁入りしたお艶がいじめられていると付いて行った召使のお杉の知らせ。そこへ御屋敷の金役所の役人横島曽平太返金に来るが石にすりかわっている。同情した福田屋は受け取りを書く。曽平太が番頭杢蔵と共謀した騙りである。徳島屋夫婦、嫁お艶をいびる。お杉なぐさめる。夫の孝五郎帰宅するもつれなくするが、最後に徳島屋の実子でないのでわざとの放蕩と本心を明かし蜀紅錦の香包みと古金を渡し、二人は結ばれる。

下巻［第三回］孝五郎勘当。お艶実家へ戻る夜道に、召使い久作やお杉から、徳島屋のおみね福田屋番頭杢蔵と駆け落ち徳島屋番頭善六も逃げる事を聞く。花水橋で富貴屋に会う。一方、同所で曽平太・善六・杢蔵あらそう。善六が切

られ杢蔵は川の中へ飛び込む。曽平太（実はおみねの子）は誰かに斬られ、手持ちの四百両奪われる。また、おみねは、わが子曽平太ゆえ、現場花水橋にいた男を夫と知らず訴人。歩平は曽平太殺しで問注所に引かれる。［第四回］孝五郎向島昔屋に料理屋を営む菊の井と共にいる。お艶眼病の母おつると花見、噂話により昔屋へ赴き孝五郎と再会。目貫から元よりの許婚と知る。徳右衛門はお艶に浪人であった父実作と名乗り出る。菊の井盃持ち来りお艶孝五郎結ばれる。

『松の操物語』は、棚橋正博氏が指摘する如く写本『江戸紫』の影響がある。商家に引き取られる浪人の捨て子が『江戸紫』では男の子であるのを『松の操物語』では女子としたり、物語後半で『江戸紫』お組の眼病を母にするなど反措定の形をとったり、徳島屋の嫁いびりは、以後の人情本にはあまりみられないものであるようだが、これも『江戸紫』のお組に対する惣次郎継母の態度をかなりエスカレートさせたものと考えられる。写本もの一般と近い。冒頭にあった福の神・貧乏神の件などのように創作の部分も多いから、これらは『江戸紫』を適宜アレンジしたと考える。写本『江戸紫』を『清談峯初花』に、写本『珍説恋の早稲田』を『椰の二葉』にと刊行される動きのなかで、初期人情本にはこのような写本に近い作り方がされるものが有っても不思議ではない。[注1] なおこれらは三作品とも大島屋傳右衛門により刊行されている。『松の操物語』は上記例から、写本を補綴したのではなく、創作ものであろうと考えておくが、写本ものに近い作りであることは確かである。

さて、写本『江戸紫』を『清談峯初花』に刊本化した際二編五冊という分量となったのに比し、『松の操物語』一応の結末を三冊という分量でつけた。しかし、実際はたとえば上巻の第壹回は縁談と吉原通いの戒めに費やすという、筋立てをあまり気に掛けない書き方になっている。上述の嫁いびり、徳島屋の使用人の不平やすさんだ様子等々も、同様である。いくつかの場面に丁数を費やしてしまうという、いかにも人情本らしい構成の結果、わずか三巻の中での団円

は、菊の井が盃持ち来りお艶孝五郎が結ばれることを半丁ほどで済ませている。それでも一応の結末が付いているのである。むろん、序文や末の後編予告にも全十回とし、『松の操物語』はそのうち四回目で終わり、「作者チョン〳〵〳〵まづ此本はこれぎり二編目じゃ引〳〵〳〵アイ引」とし、後編三冊の予告を記す。そして、ここに残されたのは問注所の結末であった。

二　『松の操 第二輯』貞烈竹の節談』

まずは内容からである。

上巻

序文　琴通舎英賀　吾友南仙笑楚満人が一筆庵可候主人の『松の操物語』の続編『貞烈竹の節談』中本三冊を著したこと。登場人物について太助（江戸前の英雄（まさらお）、魚屋）・徳右衛門（律儀）・杢蔵（悪）・正宅（乞かげん＝悪）・菊の井（人参代にや身賣いまはお菊）・孝五郎・お艶（貞婦）・久助（下賤ながら観念）と紹介。

口絵1　悪人を懲らしめる徳島屋孝五郎と肴賣多助（見開き）

口絵2　雨中の南都正宅と書状を持つおきく（見開き）

口絵3　花を手にする冨貴屋徳右エ門と見据えるおゑん（見開き）

本文［第五回］福田屋主人が亡くなったので後家お雀（つる）・娘お艶・下女お杉は庵崎（いほさき）の別荘に住んでいる。お雀とお杉が貸本屋の置いていった春水の作品『明烏後正夢』二編のうわさをし、嫁お照にわが娘をなぞらえ案じる所へ病のお艶うなされ起き、前編四回の話を夢に見たとする。母は徳右衛門が実父というのは本当だという。「夢は正夢」と一同向島

へ孝五郎を訪ねに行く。○粋がり二人の会話。○お艶とお雀が昔屋へ行くと夢の通り孝五郎の家であったが、取り込んでいる。孝五郎が、父歩平を案じて自分が犯人だといったうわ言を医師南部正宅により訴人され、花水橋の人殺しで岩永左衛門に捕らえられ代官所へ引き立てられていることを、お菊から聞く（1オ～12ウ）。［第六回］問注所。岩永は孝五郎にうわ言の件と正宅への礼金が曽平太が殺され奪われた星月夜の極印の金子であることからおまえが犯人だという。孝五郎この糾問に父をかばい自白するが、畠山預かる。○福田屋番頭杢蔵は徳島屋歩平女房おみねと欠落し故郷上州熊谷をめざそうとするが金がない。出牢した歩平を殺し岩永への賂金にしようとした五十両を奪う。六十六部人殺しに気付く（12ウ～22オ）。

中巻［第七回］徳嶋屋出入りの男伊達で孝五郎と友達同様の肴売、倶利伽羅の多助（太助）がお菊を慰める。正宅が怪しいという。菊の井が色仕掛けをすることになる。また太助が上州に行くので、熊谷在の父庄作に手紙を託す。○正宅の玄関、薬取りの同士の会話。○菊の井が来て岩永に便宜を図ってくれというを正宅が口説く。（1オ～13ウ）［第八回］太助上州路。揚尾、旅宿での客同士の会話。庄作に出会い手紙を渡す。お菊は女房おはたの連れ子という。次の朝おはた殺されたとの知らせに庄作は太助もろともに帰宅する。（13ウ～22オ）

下巻［第九回］所労休養中の畠山重忠のもとへ、お菊が正宅悪事証拠の文。また太助庄作が罪人を引いてくる。一方問注所では岩永の裁き、孝五郎命危うき所へ畠山出仕。本田次郎、正宅・杢蔵・お峯を引きつれ、榛沢六郎、お艶・お菊・庄作・太助・久作（ママ）・徳右衛門を伴う。重忠、各犯人を言う。正宅花水橋で曽平太を殺し四百両奪いすり替えで孝五郎に罪を擦りつける。杢蔵鳴立沢歩平殺しお峯自分の子供曽平太を跡継ぎにしようと孝五郎を追い出し杢蔵と姦通熊谷で嫉妬より庄作妻お畑を殺す。一方別の四百両落としたのは徳右衛門、孝五郎は歩平の身替りになろうとした。庄作は

五回	前編とのつなぎ	上巻
六回	前半　裁き1	
同	後半	中巻
〜	事件の進展	
八回		
九回	裁き2・後編の結末	下巻
十回	後日譚・全体の結末	

実は孝五郎の父正木福太夫、お菊は腹違いの妹という。次に杢蔵が歩平の息子であることを福田屋下男久作（同家退転ののち六十六になり鳴立沢で事件を目撃・序文では久助）証言し、よって杢蔵は父殺しの罪となる。正宅・杢蔵・お峯の処刑。孝五郎徳島屋再興、お艶妻、菊の井妾とする。久作・お杉・太助褒められる（末におはた殺し等熊谷在の一件を省略した事を記す）（1オ〜13オ）［第十回］後日譚　久作道心石地蔵建立、お崔眼病癒え、お杉太助夫婦になり昔屋を継ぎ繁昌。お艶身もごり長男孝之助徳島屋跡継ぎ次男亀太郎福田屋跡継ぎとなる。孝五郎父庄作七十お艶母おつるお杉懐胎、婦多川三賞亭で賀の祝い。徳島屋の門辺に二神落ち合い二たび去る。徳島屋の金蔵に光物落ちる。家内繁昌めでたし。＊菊の井について付言（13オ〜19ウ）奥付（20オ）・刊記（20ウ）

前編での結末のうちお艶の実父が徳右衛門という事以外は夢にし、前編と別話を展開する。畠山の裁きが上巻六回と下巻九回にあり、上巻後半＝第六回後半からは九回目まではそれに関連する事件が描かれる。つまり恋愛ものというより、どちらかというと判じ物なのである。この別話を冒頭と結末で前編『松の操物語』と関連付けて、囲い込む形にしている。

結論めいたことを先に記すと、『松の操物語』は『江戸紫』といった写本ものに沿った形で商家繁栄譚[注2]ともいう型で物語が構成されているのに比し、続編『貞烈竹の節談』は上巻冒頭五回で夫を想う嫁というかたちでかろうじて男女間が描かれるが、おおむね畠山・岩永ら問注所の主人公らの捕縛・裁きといった形で描かれているのである。

なお、『松の操物語』で富貴屋徳右衛門が自己を吉田実作と名乗る来歴で、町人である父徳左衛門が金を添えて勤番の士に養子とした＝下69ウとある。身分としての「士」が、写本『江戸紫』よりも、身分の変動があった当時の現実を写す感がある。『松の操物語』はこの例のごとく所々町人の物語に収めようという意識がある。一方続編『貞烈竹の節談』では、この九回に菊の井父百姓庄作が同時に孝五郎父でもあるともするが、これは出自を元武士とするなど前編と対照的であり、また形式的である。

裁きを見てゆこう。畠山重忠は上巻［第六回］問注所で岩永の裁きを預った後、下巻まで登場しない。しかしここ九回では冒頭から登場する。具体的には梗概に記した通りであるが、以下は注意したい。まず冒頭を引こう。「却説畠山重忠ハ此程より所労にて暫く政吏を聞吏なく。籠居の吏の徒然に兵書をよみておはせし所」と重忠は所労休養中である。そして「尤本田榛沢に言含め内々詮議をとぐるといへども」（1ウ）とする。後の岩永との対決の部分でも同様に「小子此程所労にて籠居はすれど昼夜とも。心にわすれぬ天下政吏。密に本田榛沢に申つけて詮議を遂げ。其盗賊も人ごろしも。とくに召捕おいたり」（5ウ）とするが、これは後に刊行される春水の読本『畠山重忠堀川清談』初編（文政九）でも似たようなことがある。この読本では、畠山重忠は物語早々に上洛し堀川に移住してしまう。巻四後半に再登場し最後の巻五で評定となる。その間は当事者同士のあらそい。奉行側は副臣の本田・榛沢が中心である。これと同工である。『貞烈竹の節談』は短いため、上記の通り記すのみで、実際の本田榛沢の行動自体は書かれない。両名は白州に善

悪の人々を引き連れてくるかたちで登場する。が、同じ傾向を示すことは理解できよう。畠山も「所労」とて、いったん姿を消す。本田・榛沢が実際の行動にあたるのだ。また、これは判じ物の一般的な事でもあるが、悪人の行動は裁きの前に読者にその行動として記される。本作品では、中巻に記されることで読者に了解される。そして、下巻九回で、そこまで描ききれなかったことも含め、それらを整理するかたちで記し、読者に事件の全容を知らしめ一気に解決を図る。そして、この九回は梗概に記したとおり構成も整っている。他の箇所とは違い冗漫な場面描写の手法は取られない。以上九回目までで畠山裁きは終了する。

さて、ここで、この畠山裁きを春水が用いたことについて、彼が講釈師（現代でいう講談師）であったことを考えてみる。彼が為永正輔（助）という講釈師であったことは、中村幸彦氏の「舌耕文芸家春水」（日本古典文学大系『春色梅児譽美』月報＝著述集１０）などにより周知であろう。そしてこの御論考から為永正輔が畠山裁きを得意演目としていたことがわかる。文政五年刊『軒並娘八丈』初編下巻挿絵の髪結床前の寄席のビラに「神仏俗書穴さがし、畠山重忠堀川清談」とあるからである。またもう一つの証として、文政五年刊の合巻『揚角結紫総糸』自序に「此頃聞たる夜講釈為永正輔が堀川清談其侭こゝへ切はめて」とすることだ。合巻『揚角結紫総糸』の梗概は以下の通りである。木八は悪ならでの出来心より盗みに入ると先に入った男から百両授かり逃げる。途中青砥の組子に方袖を取られる。この百両を鎌倉佐すけがやつ谷町の佐七に届ける。そこへ佐七の恋人、大磯の遊君小糸が訪れる。一方、北条の侍笹原鈴之進という、三浦泰村を讒言なし自害させ名刀本ちょう丸を奪った者がいる。この男は奉公する木八女房お花を盗みの証拠の片袖をもとに口説く。佐七小糸は木八の難儀ゆえ入水しようとするを庄屋蝶助に止められる。蝶助は佐七の父親糸問屋佐川実右衛門に息子の勘当を解くよう相談に出向く。さて、お花は鈴之進に土蔵に押し込められるが、兄の盗賊みみずく

の権次に助けられ、来合わせた馬上の青砥左衛門に訴える。蝶助と実右衛門は佐七のもとへ向かうが佐すけがやつで賊に会い、蝶助は崖から落ち、実右衛門は賊と闘う。この賊はみみずくの権次で三浦泰村の一族で、佐七は泰村の一子花若丸なのである。権次は名刀本ちょう丸を手に入れる。蝶助は一部始終を佐七に告げる。最後に鈴之進が討たれ佐七が三浦の家名を継ぎ目出度し。

中村氏や前田裕子氏[注3]が言われるとおり、この合巻の内容は現在の実録研究という視点からは「煙草屋喜八」として大岡裁きに部類できるだろう。しかし、序文の内容や『軒並娘八丈』の寄席ビラの「堀川清談」に「畠山重忠」と角書きすることから、為永正輔はこれを畠山裁きで物語っていたと考えてよかろう。色々な奉行の裁きが大岡に収斂していくことは周知のことであろうし、論じるまでもない。また、物語の都合で奉行名を変えるという方法があることもいうまでもない。事実、この絵双紙合巻では同時代の人々にはわかりやすい青砥裁きとしている。

ついでながらこの合巻での佐七が実は御曹司の花若丸であったり、名刀紛失といった趣向も後年の『梅暦』につながると考えられる。

以上、文政五年刊の『軒並娘八丈』初編下巻挿絵の髪結床のビラの傍証も含め、同五年刊の『揚角結紫総糸』、七年刊の中本『松の操第二輯貞烈竹の節談』と春水は自らのオハコの講釈畠山裁きの「堀川政談」[注4]を小説化しているのである。江戸時代の講釈の実態は不明だが、畠山裁きが為永正輔の持ちネタであり、その小説化（＝文字化）があったことまでは言えるのではなかろうか。なお為永正輔の『堀川清談』とは、上述の通り畠山重忠は冒頭と結末の裁きに登場するのみで、副臣の本田・榛沢の活躍を中心とし、またそれぞれ善悪の登場人物が事件を展開する、こうした構成を持つものだったのだろう。なお、畠山裁きは芝居種としても解釈可能[注5]だが、浜田啓介氏のご教示によると、それを援用した場合登場人

物がこれだけでは済まなくなるとのことである。つまりは畠山重忠や岩永や本田・榛沢以外にも必要になるのだろう。

講釈の方法がこの『貞烈竹の節談』に用いられている例として、下巻九巻末、裁きが終わった後の付言がある。神保五弥氏は本作品について『為永春水の研究』で、この話が三冊という短さに加え初編『松の操物語』の結末を夢にして一回分の草稿を省略したため物語が破綻したとされる（『為永春水の研究』P62）。この小説の構成が乱雑であることに異を唱えるものではないが、その根拠として、この箇所の「別に一回」以下のみを引用されているのは疑問である。この付言全体を挙げてみよう

作者曰　熊谷在にて杢蔵庄作がつまおはたと姦通しておみねをうとむ事。おみね嫉妬にて是を怒り。杢蔵をの、しりはづかしむる叟。杢蔵お畑と言合せ庄作をころさんとはかる叟。おみねしつとにたへずして。庄作が留守へしのびいり。おはたをころすこと。其あとへ杢蔵来りてあわて惑ひ。せうこになるべき書ものをおとし逃かへる譚など別に一回の草稿ありといへども。巻毎に丁数にかぎりあればせんかたなく此一章を欠り。看官幸に此段のつばらならざるを怪しむ叟なかれ（下巻11ウ～12オ）

ここは中巻［第八回］太助が上州路揚尾の旅宿で出会ったお菊の父庄作が、次の朝おはたが殺されたの知らせに、太助もろともに帰宅する部分および、下巻の裁きの言葉「又歩平が女房たるお峯は（中略）かの杢蔵と姦通し。夫を手傳ひ殺せし上熊谷在にて嫉妬にせまり。庄作が妻のお畑を手にかけながら。そしらぬ顔にてくらせしも跡より忍び来たる彼杢蔵が落したる。手紙のせうこにあらわれたり」（七ウ～八オ）を受けたものである。この付言の神保氏が引用しなかった前段の具体的事例の「おはた殺し」を現代の演芸でいうなら牡丹灯籠「栗橋宿」をも想起させるものである。講釈の一席として考えるならば、鄙に落ちていった男女のまちがいによる脇筋であろう。春水作同年刊『仮名佐話文庫』

後編に佐野次郎兵衛が北条家渋谷伴左エ門を殺し五十両を奪いその妾おたよと入間川辺に駆け落ち零落するのと同工である。これを新たに付け加えようとしたものと思われる。これを「草稿ありといへども」「丁数にかぎりあれば」「此一章を欠り」とする。草稿存在の真偽は別として、この断り書きは上記八回および九回の言及を正しく受けていると考えられる。第九回の構成が整っている一例と思われる。これを本作品の構成の乱雑さや破綻例とすることは出来ないのではなかろうか。ここは、逆に講釈の手法を踏まえることで読み解くことが可能だと思われる一例であろう。講釈＝講談は、周知のごとく、基本的に一席ものではなく連続物であった。それは明治期の講談速記本をみても理解できる。事実現代でも昭和年間の後半までそれが主流であったし、現在でも行われている。[注6] 江戸時代も当然講釈は連続物であった。その一席〳〵は主筋を語るものから、本筋とは無関係なものまである。上記のごとき略された「おはた殺し」もその一例であろう。このように『貞烈竹の節談』は講釈の手法が強い作品だと思う。

三、構成の乱雑さや破綻

神保氏のこの引用については上記のように考えるが、『貞烈竹の節談』に構成の乱雑さや破綻があることは確かであろう。春水人情本は『明烏後正夢』（文政四～）をはじめとする初期作品から編を重ねる、つまり長編化する傾向がある。ところがこの中本作品はわずか三冊で本話自体および『松の操物語』の一応の結末をつけている。それゆえの現象でもあるのだ。その一例として、梗概のなかに数ヵ所記した「〇」の箇所の問題もある。これは本文中に通常の字と同じ大きさで実際あるものである。つまり中巻までは回の途中にぶつぎれに話をならべてしまうことがある。まさしく手荒な方法といえよう。神保氏の言われる構成の乱雑さをあらわすと思われる例である。前述したわずか中本三冊の分量

も、さらに上巻冒頭は前編の結末を夢にするために使われ、下巻後半は『松の操物語』『貞烈竹の節談』全体の結末として費やされてしまう。曽平太殺しに対する事件解決・謎解きという一つの統一テーマとして読み解こうとするならば二冊程度の分量しかなくなる。ところが、さらにこの少ない分量の中に、歩平を殺しのほか、〈丁数限りあれば〉と一回分の草稿を省略したとする上州のおはた殺しの発端までと新事件までも織り込んでいる。そのような中、「〇」の箇所は場面切替えが素直に行われていることもあるが、中巻七回これからお菊が乗り込もうとする正宅の玄関での薬取りの会話など、ぶつ切れの感が強い乱雑なものである。このような方法で場面描写をしてしまうのである。八回太助が庄作に出会う揚尾の旅宿は膝栗毛もどきの客引き女との会話や同宿客同士の会話は冒頭からなので「〇」こそ使われていないが、同様な例である。少ない丁数に漫然とこれらの描写が挟みこまれている。「〇」による場面転換はおそらくは草稿の寄せ集めにも起因しよう。しかし、この方法により分量の少なさを補う手立てともなっているようだ。

さて、「〇」による挟み込まれた上記いくつかの場面描写の内容自体は『松の操物語』にもあった中本一般のものであろう。本作品では、それに加え（第一回目の夢の形で本話を前編『松の操物語』と別の物語とする別荘のくだりと第十回目前後編全体のしめくくり以外にも、）色々な物語の種がまかれている。それはまかれたままで終わったようであるが、それらを拾い出しておくことは無駄ではあるまい。

・魚売太助（多助）　この人物は『貞烈竹の節談』で初出だが序文に「強傑者と呼ばれる。江戸前の英雄。弱きを太助が渡世の魚市に商内の小股を潜る堪忍袋の〆くゝりよき。」とされる。口絵にも孝五郎と共に悪人を懲らすかたちで描かれる。本文では梗概に記した通り中巻［第七回］で登場し徳嶋屋出入りの男伊達で孝五郎と友達同様の肴売、お菊を慰めまた犯人探しに知恵を出す。また上州熊谷に赴きお菊父庄作に会う。このように男伊達ぶりが描かれる。しかし下

巻裁きでは出廷するのみ。結末ではお杉と夫婦になり昔屋を継ぐ。これらは筋立て上描かれているに過ぎないと解する。序文・口絵・中巻を通じ男伊達として描くが、本作品の紙面ではそれだけで終わってしまっている。なおこの人物から想起される「一心太助」はこれより本作品より先行すると思われる実録『大久保武蔵鐙』後編には既に登場しているようだ（高橋圭一氏「彦左の変身ー実録『大久保武蔵鐙』を中心に」『実録研究』清文社２００２刊参照）。

・菊の井　これについては下巻末の細字の付言を引く「前にいふべき叟なるを忽卒にしてわすれたり。此巻中なる菊の井は初編の首巻にしるしたる。菊の井が二代目なり。かの花賣姥がむすめ菊の井の傳はこゝにかゝわらざれば記さず。孝五郎の妾となりし菊の井とこんじて。思ひちがいのとがめ有んかと穴さがしの君子にことわるのみ」。『松の操物語』の菊の井が初代で、『貞烈竹の節談』のが二代目であり別人だというのだ。「かの花賣姥」とは『松の操物語』上巻で登場した浪人吉田実作＝のちの富貴屋徳右衛門の隣りに住み浪人の妻の弔いなどの面倒を見てくれた初代菊の井の母である。本作品冒頭でお艶の見たのを徳右衛門が本当の父ということ以外夢にしたためのこだわりなのだろうか、菊の井を別人にする断りのほうが却って読者を混乱させると考える。稿者は九回末の断り書きに整合性を説いたが、この付言のほうがむしろ辻褄があわないと思う。

この付言の存在理由の一つとして奥付の『松の操物語』第三輯の予告があると思う。『松の操物語』の初代菊の井が身をよせた梅屋何某の家の騒動を、太助の男気と徳右衛門の情で無実の罪をのがれる畠山裁きだとし「一名倶利伽羅太助任侠傳」とする（全文を書誌事項に翻刻した）。描ききれなかった魚屋太助の任侠ぶりを描き、畠山裁きをもう一度描こうとしているのである。そして初代菊の井を描きたかったのである。『松の操物語』でも孝五郎の放蕩勘当の原因となった人物としての菊の井は記されているが、男女の逢瀬は描かれてはいないのである。少なくとも稿者にとって理

解しがたい下巻末付言は、この予告を補完するためだったのかもしれない。なお春水は「菊の井」に執着があり、これが後の『菊廼井草紙』四編十二冊（文政八・十二）という別の物語となる。

・久作道心　この人のことは梗概に書いたとおりで六十六部になり事件を目撃、後に石地蔵を建立した。そしてさらに結末賀の祝い後「くわへて久作道心が年頃の願望成就して。六地蔵を鎌倉の入口〳〵へ建立し。ければ。世の人かれをさして地蔵坊とよびなしぬ。其後また地蔵坊正元といへる者。おなじく濡仏を建立す。吉三道心というものあり。俗の時の名にや。此久作法師と混ずべからず」（下巻十五丁）とする。久作が六十六部になったことは無論ありきたりだが、「地蔵坊」についてはこのころの春水が諸国を遍歴する僧を描くことがあったことを思い合わせることができる。例えば、『藤枝恋情柵』の初二編に出て来る一夢法師（初二編は文政七・八）や『仮名佐話文庫』（全三編＝文政七～八？）の見性法師などがいる。この地蔵坊は両法師に比べ活動はしていないが、一種の僧伝のうちなのかもしれない。なお「地蔵坊正元」や「吉三道心」への言及は、筋立てを中心とする小説作法から考えるとおかしな書き方なのだが、僧伝や読本の手法でもあろうが講釈の引きごとのあり方や脇筋のつけ方とも通じる。

以上、魚売り太助と菊の井はたまた久作道心を取り上げてみたが、作品の短さも手伝うのだろうが、様々なものが素材のまま置かれている。

なお「上州熊谷」について付け加える。太助が久作に会うのは、江戸の人間が地方に出かけその土地に逼塞する人間にあう人情本の一趣向である。杢蔵おみねの件は、本話構成についてこの付言を上に示した通りである。地方での艱難辛苦は、紙数があれば語られる可能性もある。

このように畠山裁きを骨格とするこの物語には、わずか三冊の中に色々な物語の種がまかれていると理解することも

出来よう。一貫性を求める見方をするならば、構成の乱雑さや破綻と捉えることも可能だが、ここにも初期人情本の一特徴を見ることが出来よう。

以上、『貞烈竹の節談』は前編『松の操物語』を受けた形で曽平太殺しなどに対する畠山裁きを中心とした物語であった。もちろん判じ物は後期小説に限っても馬琴の読本『青砥藤綱摸稜案』を代表とし、実録写本でも『板倉政要』『大岡政談』はじめ多くある。人情本でも読本の影響から判じ物がもちろん利用されてもいるのだ。同時期でも人情本の筋立て付けの常套手段のひとつであることは、同じく春水の『八重霞春夕映』（文政六～九）が青砥裁き、鼻山人の『恐可志』（後編同十二）が畠山裁きで、物語全体の骨格ではないが、結末を付けていることからも理解出来る。本稿では、そのような諸影響のうち、『貞烈竹の節談』を「堀川清談」が春水＝講釈師為永正輔の得意演目ゆえに、骨格としてひとつの作品をなしていることを考察した。この作品はすでに文政四年『八笑人』二編に「畠山情の聞書」という書名が付けられている（棚橋氏「帝京国文学」8参照）。「堀川清談」のうち、今でいう「煙草屋喜八」を扱った文政五年刊の合巻『揚角結紫総糸』を経て、本作品は文政七年に刊行された。分量自体わずか三冊なのに加え、例えば場面描写を多く置くなど中本の持つ性格をそのまま出し、また初期人情本だからであろうか、特段裁きとは直接結びつかない事象までを次々に記すゆえ、裁きに関する記述は限られてしまう。それでも畠山はあまり表に出ず榛沢本田を用い事件を解決する祖型はきちんと用いている。そして、文政九年・十一年には読本『畠山重忠堀川清談』が刊行される。これが天保三年『梅暦』へと発展する。

『貞烈竹の節談』は、『松の操物語』という写本『江戸紫』に準拠した作品に畠山裁きにより継ぎたした後編作品であ

る。後の『梅暦』は、丹次郎お蝶を中心とした写本『江戸紫』を祖型とした商家繁栄譚と、畠山裁きによる趣向が融合した一作品が成立するに至る。そこでは当然本田次郎を活躍させ、丹次郎が榛沢六郎の、お蝶が本田次郎のそれぞれの隠し子ということまで付け加えている。『梅暦』の成功には色々な要因があるだろうが、自身の講釈の持ちネタとしても手馴れている畠山裁きという趣向を手堅く使い、筋立てを好む読者群をも取り込んだことが一因であることは言えるのだろう。この畠山裁きを中心とした『梅暦』の検証が面白いのだが、これは次回の連続としたい。

注

（注1）写本もの人情本については「近世文芸」70拙稿『人情本の型』1999参照

（注2）商家の跡継ぎが弟などに家督を譲ろうとわざとの放蕩零落、許嫁も三角関係や家のことで苦労するが末は結ばれ家も栄えるという人情本の基本的な型。注1拙稿参照

（注3）「為永春水の初期合巻」（叢書江戸文庫『人情本集』1995月報）

（注4）畠山裁きを『堀川清談』というのは、春水がこのあと読本として『畠山重忠堀川清談』を刊行するが、初編（文政九）で畠山重忠は、物語早々に大仏供養のため上洛し堀川に移住したり、二編（同十一）では京都の裁きであることも理解の一助となろう。またもともと〈畠山重忠〉と角書していた本書であるが、『堀川清談』の意味が解りづらくなったのか後年『畠山仁政録』と改題されている。

（注5）『明烏後正夢』（正編は文政四～七）をはじめ、『松の操物語』にも本稿梗概結末のごとき芝居形式の修辞がある。また本作品には「それだから芝居でも三建目じやぁ。敵役か強敵いばつて色吏師や実事師を無実の罪に落し。それから其女房が身を賣たり種々な難義をしやすが。五建目の大詰になつてごろふじまし。いつでも敵役が見あらわはされて計る〳〵と思ひしに。かえつて汝等にはかられしか。残念やといひやす」（中巻2ウ）と芝居作者である合作者の駒人

（＝白頭子柳魚）による芝居知識を基盤にもつ記述もあるが、本稿では講釈の側から考察する。

（注6）たとえば三代目神田松鯉先生「赤穂義士本伝」四七席。また近時、本年七月大阪直木三十五会館の文月毎日亭で旭堂南海先生が「難波戦記」を、南湖先生が「寛政力士伝」を一月連続で読んだ。

『貞烈竹の節談』書誌

中本三冊

見返し

上巻

見返し「松之操後編／貞烈竹節談　全三巻」　南仙笑楚満人作／溪斎英泉画／文永堂版／文政七申春新鐫」

序文　序題　貞烈竹節話序　二丁半琴通舎英賀（丁付け無・最終丁が「松ノ口二」のオモテになる）

口絵見開き三丁　丁付け「松ノ口二（～四）」（裏丁末部分）

本文　二一丁

丁付け　「松ノ　（～廿二了）」一丁目（口絵3の裏丁）が「松ノ　」で表記なし。裏丁末部分に彫られる。但し「松ノ廿二了」は表丁末

内題「松の操第二輯 貞烈竹の節談巻之上　江戸南仙笑楚満人／驛亭駒人　合作」
尾題「貞烈竹乃節談巻之上終」
挿絵1「戀情の病苦稗説の蛮苦交逼る」病床のお艶にお杉ら明烏二編を見せる（5ウ―6オ）
挿絵2「南柯の一夢赤縄を導て禍をかもす」お艶お雀昔屋を訪ねる（15ウ―16オ）
中巻
本文　二一丁半
丁付け　「松中ノ二（～廿二了）」一丁目はなし。裏丁末部分に彫られる。但し「松中ノ廿二了」は表丁末。
内題「松の操第二輯 貞烈貞烈竹の節談巻之中　江戸南仙笑楚満人／驛亭駒人　合作」
尾題「貞烈竹乃節談巻之中終」
挿絵1「悪醫を蕩て密書を得たり」お菊正宅を色仕掛け（6ウ―7オ）
挿絵2「義男不意して正作が旅宿に會す」太助正作と会う（14ウ―15オ）
下巻
本文　一九丁
丁付け　「松下ノ一（～十八了・松下十九）」裏丁末部分に彫られる。
内題「松の操第二輯 貞烈竹の節談巻之下　江戸南仙笑楚満人／驛亭駒人　合作」
尾題「貞烈竹乃節談巻之下終」
挿絵1畠山重忠籠居の読書に庭前の蝶の舞うを見る（3ウ―4オ）　＊詞書なし

挿絵2白州（上半分は本文）（8ウ―9オ）　＊　〃

挿絵3徳島屋の金蔵に光物落ち、通行人驚く（15ウ―16オ）　＊　〃

奥付（20オ＝丁付無）

江戸作者　南仙笑楚満人／驛亭駒人・傭書　瀧野音成・浮世繪師　溪齋英泉・松藤操第三輯演説梅香物語　全三冊　楚満人作英泉画　一名倶利伽羅太助任侠傳　此書ハ前編松の操第一回にいへる先の菊の井が身をよせし梅屋何某が家に奇代の珍事を引出す事に始り太助が男気徳右衛門が情にて無実の罪をのがるゝ事を□畠山がさばきも清き物語来春發兌の時を待得て見るべし　文永堂謹白

刊記（20ウ＝丁付無）

刊記

文政七申春發兌　江戸書房　人形町乗物町鶴屋金助／日本橋砥石町大坂屋茂吉／橋町二丁目越前屋長次郎／弥左ヱ門町大嶋屋傳右ヱ門

原表紙は　青竹をデザインし表紙に「松の操」　裏表紙「後編」と書く

題簽「貞烈竹節談　上（中）」　下巻未見

管見書　架蔵A：上・中（末二丁欠）　初印　底本とした

架蔵B：上（破損あり）　初印

架蔵C：上・中・下（虫損や落丁あり）　『松の操物語』と合六冊の後印本（文永堂板）　無地薄緑表紙（前編は濃緑表紙）、題簽は原題簽　「人世栄枯松の操物語　上（中・下）」間に「二篇」と手書き（「松の操物語」の題簽の利用）。下巻の底本および中巻の補い。

蓬左文庫蔵本　上巻1冊　国文学研究資料館マイクロフィルムによる（＊書型は半紙本に中本の匡郭にて、また同文庫蔵の『松の操物語』三冊とは別本）。

＊未見　天理図書館蔵本　館の御教示によると、『松の操物語』と前後二編合本二冊後補表紙。刊記を欠く。

付記　本稿は「国文研プロジェクト研究『近世後期小説の様式的把握のための基礎研究』平成18年度第一回共同研究会」（同年八月二日）での発表の一部です。御教示いただいた浜田啓介氏、高橋圭一氏はじめ参加者の皆様に感謝申し上げます。